

厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業）
「拠点病院集中型から地域連携を重視した HIV 診療体制の構築を目標にした研究」
令和 2 年度 分担研究報告書

【研究分担課題名】 HIV 感染症患者の地域連携の推進と地域看護の役割に関する研究
—拠点病院から地域への橋渡しを促すための意見交換会から考える—

研究分担者：鈴木 明子 城西国際大学 看護学部 教授
研究協力者：神明 朱美 城西国際大学 看護学部 助教
研究協力者：松尾 尚美 城西国際大学 看護学部 助教
研究協力者：丸山 あかね 城西国際大学 看護学部 助手
研究協力者：小川 ひろ子 城西国際大学 看護学部 実習指導教員

研究要旨： 千葉県 HIV 感染症患者の状況を伝えることで、地域の施設で HIV 感染症患者の受け入れを促すことを目的として、9 月に千葉市で意見交換会を開催した。案内を出した 1,011 施設中 11 施設 13 名が参加して、千葉県の最近の HIV の動向、HIV 感染症患者の現状、地域との連携で感じる困難、当事者家族からのメッセージを聴講したあと、参加者間での意見交換を行った。参加者 13 名のうち、これまで HIV に関する研修会に参加したことがないのは 10 名 (76.9%) であり、啓発活動としての意見交換会の役割は大きい。参加者は、地域、拠点病院や往診する開業医との連携を望んでおり、介護職員に対する研修会を行い具体的な感染対策の方法について知ること、対応可能な施設が増えることが期待される。また、地域看護の立場では「生活すること」を視点に情報発信する役割が求められる。

A. 研究目的

HIV 感染症患者の地域連携を推進する上での、地域の看護職の役割を明らかにする。また、HIV 感染症患者の地域連携を推進するため、意見交換会を実施し、効果的な啓発活動の在り方を検討する。

B. 研究方法

医療・福祉・行政の関係者を対象に意見交換会を、千葉市において土曜日の午後に対面で実施した。

対象は、千葉市とその周辺 10 市の訪問看護師：訪問看護ステーション 196 施設と、ケアマネジャー：居宅介護支援事業所 815 施設合わせて 1,011 施設として、案内文書を施設に郵送した。

意見交換会の内容は、HIV の最近の動向（医師の立場から）、拠点病院の看護の視点（看護師の立場から）、地域との連携の現状（ソーシャルワーカーの立場から）、当事者からのメッセージ（薬害エイズ家族の立場から）のあと、参加者間で意見交換を行った。参加者にはアンケートを依頼し、興味・関心の内容、それに対する満足度、参加による HIV に対する認識の変化の有無やその内容について検討した。倫理面への配慮として、匿名性の保障、協力しなくても何ら不利益を被らないこと、研究目的以外の使用をしないこと、結果はエイズ関連学会や報告書などで報告することを口頭と紙面で説明した。

HIV 陽性者が地域で共に生きることが当たり前となってくる今、
私たちは何ができるでしょうか？
共に考えていきましょう

《意見交換会》

HIV 陽性者の在宅療養を 地域で支えていくために

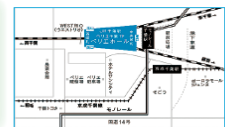
2020 年 9 月 5 日（土）13:00 ~ 16:30
ペリエホール 7 階 Room C (JR 千葉駅東口直結)

先着 20 名様 参加費無料

申し込み・お問い合わせ：千葉大学医学部附属病院 感染制御部
TEL: 043-222-7171 (内線 6445) FAX: 043-226-2663

内容

1. HIV の最近の動向（医師の立場から）
2. HIV 感染者の状況（看護師の立場から）
3. 地域との連携の現状
（ソーシャルワーカーの立場から）
4. 当事者からのメッセージ（家族の立場から）
5. 意見交換会
～自分たちの施設で受け入れるとしたら



裏面が参加申し込み FAX 用紙となっております

主催：厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業）主任研究者：猪狩英俊
分担研究者：鈴木明子／城西国際大学看護学部教授

C. 研究結果

意見交換会には、案内を通知した 1,011 施設のうち、11 施設の 13 名が参加した（案内した施設の 1.01%）。それに講師やスタッフ 7 名を合わせて合計 20 名で実施した。参加者にはアンケートを依頼し、13 名から回答を得た（回収率：100.0%）。

1) 回答者の属性

性別は、女性 9 名 (69.2%)、男性 4 名 (30.8%) であった。年代は、40 代 6 名 (46.2%) が最も多く、次に 30 代 3 名 (23.1%) であった。職種は介護支援専門員が最も多く 8 名 (61.5%) であり、介護職員、看護師、保健師、事務、教員が 1 名ずつであった。その職責での経験年数は、11.1±11.6 年、現在の勤務先の経験年数は 3.7±2.8 年であった。

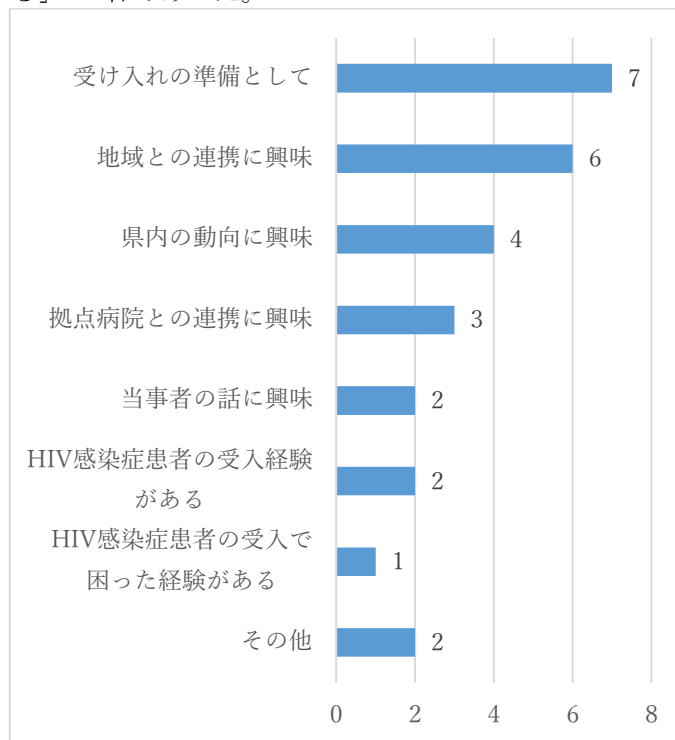
性別	女：9 名 (69.2%)
	男：4 名 (30.8%)
年代	30 代：3 名 (23.1%)
	40 代：6 名 (46.2%)
	50 代：2 名 (15.4%)
	60 代：1 名 (7.7%)
	70 代：1 名 (7.7%)
職種	介護専門職員：8 名 (61.5%)
	介護職員：1 名 (7.7%)
	看護師：1 名 (7.7%)
	保健師：1 名 (7.7%)
	事務：1 名 (7.7%)
	教員：1 名 (7.7%)
職責での経験年数	平均値±SD：11.1±11.6 (1～44 年)
現在の勤務先年数	平均値±SD：3.7±2.8 (1～11 年)

2) 意見交換会および研修会参加の有無

意見交換会は今回が 4 回目であるが、これまでに意見交換会に参加したことがある回答者は 4 名 (30.8%) であった。そのうち 3 名から参加理由として「介護支援専門員として、依頼を受けた際、支援の方法の手がかりを得る為」「集う参加者の方々から得られることが、共感できたり参考になったりするため」「現実とイメージのギャップをどのようにして埋めていけるかという思い」という 3 点が挙げられた。また、「前回の意見交換会の参加以降 HIV に関心を持った」4 名 (100%)、「意見交換会の内容を職場で話して情報共有した」2 名 (50.0%)、「受け入れについて準備を始めた」1 名 (25.0%) というように、意見交換会への参加は、HIV 感染症患者の受け入れ促進に効果があった。

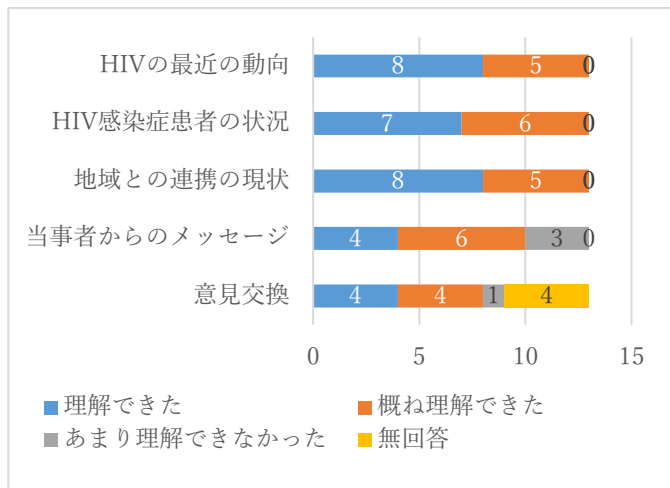
参加者 13 名のうち、これまでに HIV 研修会に参加したことが「ある」3 名 (23.1%)、「ない」10 名 (76.9%) であり、HIV 感染症患者の家族の話を聞いたことが「ある」6 名 (46.2%)、「ない」6 名 (46.2%)、「無回答」1 名 (7.7%) であった。

参加理由は複数回答で、「いつか HIV 感染症患者を受け入れるための準備として」7 名が最も多く、「地域との連携に興味がある」6 名、「千葉県の動向に興味がある」4 名、「拠点病院との連携に興味がある」3 名であった。



3) 意見交換会の理解度

内容の理解度は、HIV の最近の動向、HIV 感染症患者の状況、地域との連携の現状とも「理解できた」または「概ね理解できた」と全員が回答した。当事者からのメッセージは、10 名 (76.9%) が「理解できた」または「概ね理解できた」と回答した。参加者間での意見交換は、8 名 (61.5%) が「理解できた」または「概ね理解できた」と回答し、「無回答」が 4 名 (30.8%) であった。自分の興味関心に対してこの意見交換会は、「参考になった」8 名 (61.5%)、「概ね参考になった」3 名 (23.1%)、「無回答」2 名 (15.4%) であった。具体的な意見として、「参加されていた方の取り組みや意識に刺激された」「病院側の話を聞くことができた」「科学的に正しい話をしても浸透していかないが、考え方を教育していく」「在宅生活に対する具体的な援助をもっと知りたい」「その人の生活をどのように支えるのか考えたい」「配置薬など薬をもっと処方しやすくすると生活や地域の中にもっとなじめるようになる」などが挙げられた。



4) HIV に対する認識

HIV に対する認識の変化は、「全く変わらない」 1 名 (7.7%)、「ほとんど変わらない」 1 名 (7.7%) に対して、「少しは変わった」 3 名 (23.1%)、「大きく変わった」 7 名 (53.8%) であり、認識の変化があったと答えた者が 10 名 (76.9%) であった。具体的な認識の変化に関する具体的な記述は、感染に関するものが最も多かった。

・感染

- 漠然と「恐い」という認識があったが、薬剤を毎日きちんと内服していれば人に感染させるリスクはないということが分かり、極端に恐がるのはナンセンスだと思った
- HIVよりもHCVやHBVの方が何十倍も感染リスクが高いということが理解できて良かったです!!!
- 治療を受けていれば、感染リスクがC肝より低くなる事
- HIVは感染力が弱いこと
- 感染予防うつる、うつらないが多少明確になった

・感染対策

- スタンダードプリコーションの大切さを認識しました
- C肝対応が出来ていけば受け入れられること

・患者

- 本人ともっと話をしようと思った

・治療

- 治療がどんどん変化している

・地域連携

- 認知症の併発が今後増えてくるので、どう地域と関わりを持たすか考えるきっかけになった

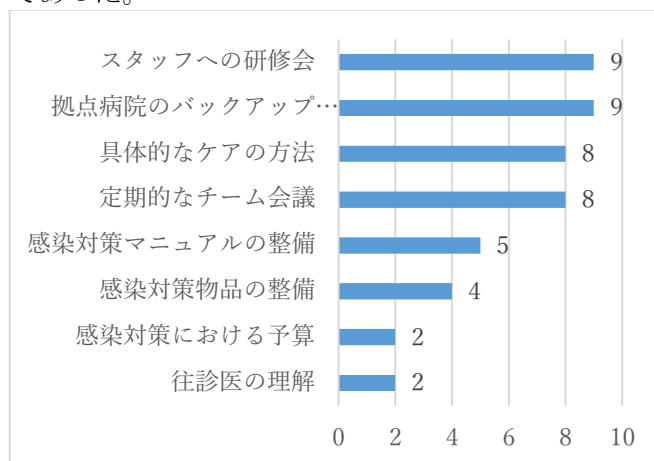
・意見交換会の意義

- 現況を知る大切さ

5) HIV 感染症患者を受け入れるには

過去または現在、自施設で HIV 感染症患者を「受け入れている・受け入れたことがあった」 1 名 (7.7%)、「受け入れ可としているが今のところない」 4 名 (30.8%)、「受け入れていない」 1 名 (7.7%)、「わからない」 4 名 (30.8%)、「該当しない」 3 名 (23.1%) であった。自施設で HIV 感染症患者を受け入れるために必要なこととして、複数回答で、「スタッフへの研修会」 9 名、「拠点病院の相談の機会やバックベッドなどのバックアップ体制」 9 名、「関わっている人たちが集まって定期的に行うチーム会議などの情報交換の場」 8 名、「具体的なケアの方法」 8 名などが多かった。今の地域において HIV 感染症患者の受け入れが進まない原因は、複数回答で、「施設の介護職員の理解が得られない」 6 名、「施設管理者 (理事や施設長) の理解が得られない」 「施設

設の感染管理担当者の理解が得られない」「施設のほかの利用者や家族の理解が得られない」が 3 名ずつであった。



D. 考察

千葉市は、千葉県の中心部に位置し、県内のどこからでも集まりやすく、HIV 感染症患者数も多い市町村のひとつである。昨年同じ時期に同じ会場で行った意見交換会では 46 名の参加者があったが、今回はコロナ禍の影響により 13 名と激減した。全体の参加者は少なくなったが、一方で、今回の意見交換会への参加が 2 回目以上というリピーターが 13 名中 4 名 (30.8%) であった。これまでに HIV 研修会に参加したことがないのは 10 名 (76.9%) と多かっただけではなく、最新の HIV に関する情報を提供できること、参加者が感染や感染対策を知るためには効果的であること、顔が見える参加者間での情報交換は有用であり、意見交換会開催の意義は大きい。

参加理由として、地域との連携や拠点病院との連携に興味があると挙げられていることから、参加者間の関係づくりという点を意識した意見交換会である必要がある。意見交換会の方法としてオンラインでの開催も検討する必要があるが、知識理解を広めるための啓発活動とした目的である場合はオンラインでも良いが、参加者間での関係づくりを目的とした場合は、少人数でも対面で顔が見えるような形で実施する方が望ましい。また、意見交換会での講演は、拠点病院の立場から疾患や治療、感染対策について視点を置いた話になるが、地域の立場では「生活すること」を視点を置いた具体的な話を求めている。地域看護は、病いを抱えて生活する人々をケアすることであることから、意見交換会においては、病いだけではなく生活に関する情報を、看護師の立場から発信する役割が求められている。現状では、C 型肝炎や B 型肝炎、梅毒の感染歴がある患者は受け入れている施設もあるので、HIV 感染症はそれと同じ対応であることをアピールすると、HIV の具体的な感染対策もイメージできると思われた。

HIV 感染症患者の受け入れを地域の医療福祉施設で進めるためには、拠点病院が常に相談にのる体制があり、バックベッドが確保出来ていることや、往診する開業医とも連携出来ることを前提として、介護職員に対する研修会があり、具体的な感染対策の方法について知る、というように一つずつ解決することで、対応可能な施設が増えることが期待される。

E. 結論

地域の医療福祉関係者は、HIV に関する研修会に参加する機会が少ないため、HIV の最新情報などを発信する必要がある。また、地域、拠点病院や往診する開業医との連携が可能となり、介護職員に対する研修会があり、具体的な感染対策の方法を知ること、地域の施設でも HIV 感染症患者の受け入れは可能になると期待される。地域看護の立場からは、「生活すること」を視点に情報発信する役割が求められる。

F. 健康危機管理

本研究は介入研究ではなく特記すべき健康危険情報は無い。

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

神明 朱美、他：地域で HIV 陽性者を支えるために実施した意見交換会の成果 第 34 回日本エイズ学会 (2020)

H. 知的財産権の出願・登録状況

該当なし